

近藤富枝さん (作家)

私の「十五年戦争」への思い

七十年前の夏を二十三歳で迎えた近藤さんは、人々の命を奪い、暮らしを破壊し、残された人の心に消えない傷を残した戦争のことは、「いくら言葉を重ねても語り尽くせるものではありません」と言います。いまの思いを聞きました。

平和の誇りを伝えていきましょう

人生のどこかで『源氏物語』を手に取り、また機会あるごとに読み直していくことは、皆さんにお勧めしたいことです。最近、この物語を読んでいて私が思うのは、物語が書かれた時代の十一世紀ごろの皇室が非常に安定しているなということです。源氏物語からは、そのことがよく伝わってきます。

日本の中央集権制度が整えられていったのは七世紀の半ばごろからでしょうか。それから源氏物語までの

三百年と少しで、これほどまで皇室が安定して、文化が開いていったのは、一つの驚きとっていいと思います。

日本人は平和な世でこそ、暮らしをより豊かに、文化や才能を開花させることができます。

私たちは、過去の歴史と芸術に触れ、学んでいくことで、この日本人の徳性を、より深く理解していけることでしょう。

だから私は、日本人がこれまでの七十年間、戦争放棄を明言した憲法の下で平和な暮らしを続けてきたことを、もつと誇っていいと思っています。

そして、いままで以上に声を上げて、七十年続いた平和の誇りを、次の世代に伝えるべきだと思っています。

七十年前に戦争が終わった夏、私は二十三歳でした。多くの命を奪い、社会と家族と暮らしを破壊し、残された人々の心に消えない傷を残していった戦争のことは、体験者として、いくら言葉を重ねても語り尽くせるものではありません。



●こんどう・とみえ 一九二三年東京生まれ。東京女子大学卒業。旧文部省・NHK、武蔵野女子大学などに勤務。主な著書に『田端文子村』『本郷菊富土ホテル』『一葉のきもの』『王朝継ぎ紙の世界』など多数。

戦争は、終わるまでに多くの痛ましい出来事が続いていきます。そして終わってからも、次々とひどいことが起きていくのです。

私の叔父二人は、戦後の混乱の時代に病死しています。二人とも自営業をしていましたが、身を犠牲にするような無理を続けた末の病死でした。

叔父たちのように戦後の混乱で命を落としたり、人生がめちゃくちゃにされた人を数多く見ってきました。戦争の後に、無残な目に遭い、苦い一生を送らざるをえなかった人々もまた、戦争の犠牲者であるのです。

戦争は「二歩近づき二歩後退」します

七十年前に終わった戦争は、「太平洋戦争」と呼ばれ、「第二次世界大戦」とも呼ばれます。それが一般的な呼称です。そして、八月十五日は終戦記念日と呼ばれています。

ですが私は、いまからでも、七十年前の夏を終戦と呼ぶのではなく、敗戦と呼ぶのが当然だと思います。

なぜ敗戦を終戦と言い換えるのだろうか、と、違和感を感じるのと同様に、あの戦争を、太平洋戦争や第